

里山学研究センターのプロジェクト紹介

琵琶湖を中心とする循環型自然・

社会・文化環境の総合研究

—Satoyamaモデルによる地域・環境政策の新展開—

龍谷大学法学部教授 里山学研究センターセンター長

牛尾 洋也

「琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究—Satoyamaモデルによる地域・環境政策の新展開—」（以下、本プロジェクト）は、8学部の学内研究者を中心とする文理連携の共同研究である。龍谷大学には、全学横断型・複合型・異分野融合型等の学際的研究を推進する機関として、人間・科学・宗教総合研究センターがあり、その下で個別研究センターの研究推進体制が整っている。また、大学のみならず、地域の市民向け環境教育を行い、さらに、国内外の様々な組織に対する研修機関の役割を果たしてきた。

また、琵琶湖を見下ろす瀬田キャンパスのある滋賀、および深草、大宮キャンパスのある京都の各行政および地域社会に対し、環境・循環型社会の推進を目指す研究の拠点としての基盤と地位を確立し、それにより、地域に根ざした具体的な環境政策の提案を行い、地域社会との連携を図り、大学の公共的役割を一層高める役割を果たすことを目的としている。

本研究プロジェクトでは、自然生態系に立脚した社会を構築するため、自然・客観的要因、自然要因に対する人的作用因、人の文化要因を研究対象として設定し、以下の3つの研究班および研究ユニットをおいている。また、研究班は、各要因の相互作用を意識し、それぞれの研究成果を共有するが、成果を体系的に取りまとめるため「総合研究班」を設置している。

第1の「水と生命」研究班では、「水系環境の変遷過程」研究ユニットが、第3班と共同で、まず対象となる琵琶湖水域圏の地理的現状や河川の現状とその変遷を把握するため、その歴史的検討、制度的検討を行う。次に、「生物多様性と生態系サービス」研究ユニットは、「次世代シーケンサー」を用い、水系環境の違いによる琵琶湖水域圏の生物多様性の変化と諸条件の研究を行い、第2班と共同で、環境保全型農業の生態系サービスの研究および水環境保全ツールの研究を行っている。

第2の「資源と産業」研究班では、「森林資源とエネルギー利用」研究ユニットが、琵琶湖水域圏の環境に大きく作用する森林資源の持続可能な管理・利用を研究している。そこでは、木質バイオマス・エネルギーの固定メカニズムとその利用・燃焼技術进行研究し、その科学的知見をベースとして、総合研究班と共同して、地域における持続可能な再生可能エネルギーの利用可能性と持続可能な森林管理の具体策の検討を行う。次に、「エコロジ的な食と農」研究ユニットは、環境保全型農業および新しい農業政策の研究および地域独自の「食」の研究を行い、地域における持続可能な生産と消費の構造を追求している。

第3の「人と暮らし」研究班では、「自然調和型の住環境と防災」研究ユニットが、第1班と共同で、最新の景観地理学と防災学の研究水準を取り入れ、その成果を地図上で重ね合わせ総合化の作業を行う。さらに、その成果をベースに、「資源循環型コミュニティの新たな創造」研究ユニットは、地域創生に資する循環型社会にふさわしい新しい自然調和型社会の関係性構築に向けた研究を行い、総合研究班における議論のプラットフォームを作るべく研究を行っている。

「総合研究班」は、各研究班の代表者および総合研究班取りまとめを行い、研究の進捗状況と成果の共有を図りつつ、(1)環境倫理、(2)環境教育、(3)環境政策の3本柱の形で、各研究班の研究推進と研究成果をとりまとめ、政策提言を行う予定である。

次に、各研究班のなかで特徴的な取り組みについて順次報告を行う。